

おおかみと七ひきのことみやぎ

DER WOLF UND DIE SIEBEN JUNGEN GEISSLEIN

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

（例）しゃがれしこえっ声

「#」：入力者注 主に外字の注記や傍点の位置の指定

（例）「#ここから4字下げ」

-----

—

むかし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、かわいいこどもやぎが七ひきあって、それをかわいがることは、人間のおかあさんが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので、七ひきのことみやぎをよんで、こついいきかせました。

「おまえたちにいっておくがね、かあさんが森へ行ってくるあいだ、

気をつけてよくおるすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れ  
てはならないよ。あいつは、おまえたちのこらず、まるのまんま、  
それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうのだよ。あのわるものは、  
わからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、  
なあと、声はしゃがれて、があがあごえだし、足はまっ黒だし、す  
ぐと見わけはつくだからね。」

すると、こどもやぎは、声をそろえて、

「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく気をつけて、おるす  
ばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いいま  
した。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出か  
けて行きました。

## 二

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとたたたくものが  
ありました。そうして、

「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、  
いいおみやげをもって来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしゃがれた、があがあ声なので、す  
ぐおおかみだということがわかりました。そこで、

「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、きれ  
いな、いい声してるけれど、おまえはしゃがれっ声こえのがあがあ声だ  
もの。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、あらものや荒物屋の店へ出かけて、大きな白はくぼくを一

本買つて来て、それをたべて、声をよくしました。それからまたもどつてきて、戸をたたいて、大きな声で、

「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもつて来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまつ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれをみつけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまつ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、

「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすつておくれ。」と、いいました。

で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすつてやりますと、こんどは、粉屋こなやへかけつけて行って、

「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。

「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」

そう粉屋はおもつて、ぐずぐずしていました。

するとおおかみは、

「すぐしないと、くつちまうぞ。」と、どなりました。

そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういうところが、人間のだめなところですね。

さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、こういいました。

「さあこどもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえつて来たのだよ、おまえたちめいめいに、森でいいものを見つけて来たのだよ。」

子やぎたちは、声をそろえて、

「さきに足をおみせ、うちのおかあさんだかどうだか、みてやるから。」

そういわれて、おおかみは、前足を窓にのせました。こどもやぎがそれを見ますと、白かったので、おおかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあけました。

ところで、はいつて来たのはたれでしたらう、おおかみだったではありませんか。

みんな、わあつとおどろいて、ふるえあがって、てんでんにかくれ場所をさがして、かくれようとなりました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寝床ねどこにはいこみました。三ばんめは、炉ろの中にかくれました。四ばんめは、台所だいどころへにげました。五ばんめは、棚たなにあがりました。六ばんめは、洗面せんめんだらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計の箱のなかにかくれました。

ところが、おおかみは、そばからみつけだして、ぞうさなく、ひとりひとり、かたはしからつかまえて、ただひと口に、あんぐりやっつてしまいました。ただ、大時計の箱のなかにかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずすみしました。さて、たらふくたべただけたべて、おなかがかくちくなると、おおかみはおもてへにげ出して、木のかげになって、青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしました。

三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえって来ました。

ところで、まあ、おかあさんやぎは、そのときなにを見たでしょう。おもての戸は、いっぱいにあけひろげてありました。テーブルも、いすも、腰かけも、ほうりだされていました。洗面<sup>せんめん</sup>だらいは、こなごなにこわれていました。夜着<sup>よぎ</sup>もまくらも、寝台<sup>しんたい</sup>からころげおちていました。

おかあさんやぎは、こどもたちをさがしましたが、ひとりもみつかりません。ひとりひとり、名前をよんでも、たれも返事<sup>へんじ</sup>をするものがありません。おしまい、いちばん下の子の名前まで来て、はじめて、ほそい声で、

「かあさん、あたい、時計のお箱にかくれているよ。」というのが、きこえました。

おかあさんやぎは、この子をひっぱりだしてやりました。そこで、この子の口から、はじめておおかみが来て、ほかのこどもたちみんなたべてしまったことが、わかりました。そのとき、おかあさんやぎは、かわいそうな子やぎたちのことを、どんなに泣いてかなしんだか、みなさん、さっしてみてください。

やっとのことで、おかあさんやぎは、泣くことをやめて、末っ子<sup>すえ</sup>やぎといっしょに、そとへ出ました。原っぱまでくると、おおかみは、やはり木のかげにながながとねそべって、それこそ木の枝も葉も、ぶるぶるふるい動くほどの高いびきを立てていました。

ところで、おかあさんやぎが、おおかみのようすを遠くからよく見ますと、そのふくれかえったおなかの中で、なにかもそもそ動いているのがわかりました。

「まあ、ありがたい、おおかみのやつ、うちのこどもたちを、お夕飯<sup>ゆうはん</sup>にして、うのみにのみこんだままだから、みんなきつとまだ生き

ているのだよ。」

こうおもって、おかあさんやぎは、さっそく、うちへかけこんで行って、はさみと針と糸をとって来ました。それから、おかあさんやぎは、このばけものどてっ「#」どてっ「に傍点」腹を、ちよきんとはさみで、ひとはさみはさみしました。するともうそこに、一ぴきのこどもやぎが、ぴよこんとあたまを出しました。おかあさんはよろこんで、またじよきじよきはさんで行きますと、ひとり出<sup>で</sup>、ふたり出して、とうとう六ぴきのこどもやぎのこらすが、とびだしました。みんなぶじで、たれひとり、けがひとつしたものもありません。なにしろ、この大ばけものは、むやみとががつついていて、ただもう、ぐつく、ぐつく、そのまま、のどのおくへほうりこんでしまっていたからです。

まあうれしいこと。こどもたちは、おかあさんやぎにしつかりだきつきました。それから、およめさんをもらう式の日の、仕立屋のように、ぴよんぴよんはねまわりました。

でも、おかあさんやぎは、こどもたちをとめて、

「さあ、そこらで、みんな行って、ごろた石をひろっておいで、この罰<sup>ばち</sup>あたりなけだものが寝<sup>ね</sup>ているうちに、おなかにつめてやるのだから。」といいました。

そこで、こどもたちは、われがちにかけだして行って、えんやら、えんやら、ごろた石をあつめて、ひきずって来ました。そうして、それを、おかかみのおなかに、つまるだけつめこみました。すると、おかあさんやぎが、あとから、ちよつちよつと、手ばしこく、もとのようにぬいつけてしまいました。それがいかにも早かったので、おかかみがまるで気がつかないし、こそりもしないまにすんでし

まいりました。

おおかみは、やっこのこと、寝<sup>ね</sup>ただけ寝て、立ちあがりました。なにしろ、胃袋<sup>いぶくろ</sup>のなかは石がいつばいで、のどがからからにかわいてたまらないので、ふき井戸のところへ行って、水をもうとしました。ところが、からだを動かしかけますと、おなかの中で、ごろた石がぶつかりあって、がらがら、ごろごろ、いいました。

「#ここから4字下げ」

がらがら、ごろごろ、なにがなる

そりやどこでなる、腹<sup>はら</sup>でなる。

六びきこやぎのなくこえか、

こりや、そうじゃない、ごろた石、

「#ここで字下げ終わり」

おおかみは、こううたいました。

さて、やっこのすつとこ、ふき井戸の所まで来て、水の上にかがもうとすると、おなかの石のおもみに引かれて、おおかみは、のめりました。そうして、いやおうなしに、泣き泣きおおかみは、水の中におちこみました。

遠くで見えていた七ひきのこどもやぎは、みんなかけよって来て、「おおかみ死んだよ。おおかみ死んだよ。」とさけびながら、おかあさんやぎと手をつなぎながら、おおよろこびで、井戸のまわりをおどりまわりました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。